未来をはぐくむ緑と文化のかがやくまち“板橋”

板橋区

面積 ……32.22㎢
世帯数 ……317,882世帯
人口 ……567,091人
（うち外国人）……25,473人
予算 ……2,298億円
職員数 ……3,718人

産業と生活が融合するまち
区全域に印刷業や光学機器等をはじめとする都市型ものづくり産業の事業所が立地しています。

いたばし花火大会
荒川の夏の風物詩。対岸の戸田市とあわせて1万発を超える花火が夏の夜空を彩ります。

板橋Ｃｉｔｙマラソン
フルマラソンに加え、小・中学生や車椅子の方対象のコースも設定。春本番の荒川の自然を満喫できます。令和2・3年度はオンライン開催となりました。

子ども家庭総合支援センター
子ども・家庭、地域の総合支援拠点として、関係機関とともに、子どもの「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」の保障に努めます。

歴史・見所・名所

「板橋」という地名が史料に登場するのは古く、『延慶本平家物語』によると、治承4(1180)年に挙兵した源頼朝が「武蔵国豊島ノ上滝野川ノ板橋」に布陣したという記録が確認できます。「板橋」の地名は、明治22(1889)年の町村制実施によって町名として採用され、昭和7(1932)年に東京市板橋区が誕生しました。昭和22(1947)年に特別区となり、同年8月に練馬区を分離して現在の板橋区になっています。

8月の「いたばし花火大会」は、都内最大の尺玉五寸や関東最長級700ｍの大ナイアガラの滝などで多くの人々を魅了しています。また、荒川河川敷内にコースを設定した「板橋Ｃｉｔｙマラソン」は、走りやすく、制限時間が7時間と長いことから、毎年全国から多くの市民ランナーが集まる人気の大会となっています。文化面においても、「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」など企画展において高い評価を得てきた23区で初めての区立美術館が令和元(2019)年にリニューアルされ、伝統と刷新が融合する美術館として親しまれています。さらに、令和3(2021)年3月に平和公園内の緑豊かな環境の中で新しく生まれ変わった中央図書館では、海外の絵本を手に取って見られる全国でも例のない「いたばしボローニャ絵本館」を併設し、友好都市交流協定を締結しているイタリア・ボローニャ市との友好の証として「ボローニャギャラリー」を設置しています。今後、「絵本のまち」を象徴するエリアとして魅力を発信していきます。

概要

区は23区の北西部に位置し、武蔵野の面影を残す赤塚の森や、広大な河川敷を有する荒川、美しい桜並木に彩られる石神井川など、豊かな自然に恵まれています。区内には東武東上線・都営三田線・ＪＲ埼京線など5本の鉄道路線が走り、主要幹線道路として中山道・川越街道・環状七号線・環状八号線・首都高速5号線などが通っています。

昭和7(1932)年当時の人口は約12万人でしたが、戦後の復興と高度成長期を経て、高島平団地の開発やマンション建設等により人口は増加し、現在では約57万人(外国人を含む)となっており、住宅都市・生活都市としての顔を持っています。

一方、商店街を中心とする商業、埼玉県境に近い赤塚地域における都市農業、荒川沿岸部等の工業が併存しており、都内有数の産業都市としての顔も持っています。都市型産業に求められる高付加価値化の実現に向け、「板五米店」をはじめとする商店街の空き店舗の活用や、先端的技術や研究開発型企業の誘致による既存産業との連携を通じ、

地域経済の活性化を進めています。

その他にも、区内小学校で始めた「緑のカーテン」や、乳幼児を抱える保護者が気軽に立ち寄れる区発祥の「赤ちゃんの駅」は、民間施設を含め全国へと広がりをみせています。また、令和4(2022)年4月には「板橋区子ども家庭総合支援センター」を開設し、7月からは政令指定を受けて児童相談所設置市となりました。妊娠・出産期からの成育歴の把握、成長段階に応じた関係機関等との連携などを強化し、すべての子どもたちが健やかで心豊かに成長できるよう、切れ目のない子育て支援の充実を図っています。

主要課題

区の人口推計では令和12(2030)年にピークを迎えると見込んでいましたが、令和2(2020)年から既に人口減少に転じています。これはコロナ禍の影響によるものと推察されますが、一方で、高齢化率は加速度的に上昇しており、社会保障費のさらなる増加が想定されるなど、人口減少・超高齢社会への対応を急ぐ必要があります。また、公共施設・まちのインフラ等の老朽化等が進んでおり、更新時期が一斉に到来することから、計画的な更新・再整備に向けた取組も急務となっています。さらに、近年の地球温暖化を一因とする気候危機への対応として、令和4(2022)年1月に行った「板橋区ゼロカーボンシティ表明」のもと、脱炭素社会の実現に向けた取組を加速化させる必要があるほか、ＤＸを推進し、ポストコロナ時代における「新たな日常」を見据えた持続可能な社会の構築が課題となっています。

将来展望

区は「板橋区基本構想」で掲げる将来像「未来をはぐくむ緑と文化のかがやくまち“板橋”」の実現に向け、令和7(2025)年度までのアクションプログラムとして「いたばし№1実現プラン2025」(令和3(2021)年1月策定)を推進しています。新型コロナウイルス感染症対策はもとより、「ＳＤＧｓ戦略」「ＤＸ戦略」「ブランド戦略」の3つを柱とする重点戦略を定め、限られた経営資源を集中投資することによって、行政サービスの質の向上を図り、持続可能な区政経営をめざします。ＳＤＧｓ戦略では、令和4(2022)年5月、国から「ＳＤＧｓ未来都市」に選定されたことを契機としながら、「若い世代の定住化」と「健康長寿のまちづくり」、そして「未来へつなぐまちづくり」をさらに展開していきます。ＤＸ戦略では、デジタル・オンライン化、業務改善・働き方改革などを加速させます。ブランド戦略では、ＳＤＧｓ未来都市として「絵本のまち」がつなぐ「文化」と「ものづくり」のまちを板橋ブランドとして構築していくほか、大山駅周辺・板橋駅周辺地区・上板橋駅南口駅前地区・高島平地域のまちづくりなどを展開していきます。

区立美術館
収蔵作品は江戸狩野派をはじめとする近世絵画、大正から昭和初期の前衛美術、板橋区ゆかりの作家の作品が中心となっています。
江戸文化や池袋モンパルナスを広く紹介する展覧会や、イタリア・ボローニャ国際絵本原画展をはじめとしたイラスト・デザインに関する展覧会も開催するほか、これらに連携した講演会、ワークショップ等の活動も行っています。

中央図書館・ﾎﾞﾛｰﾆｬｷﾞｬﾗﾘｰ
緑豊かな板橋区平和公園内で生まれ変わった、新しい中央図書館。「ボローニャギャラリー」は、ボローニャ市と共同で開催したデザインコンテストの最優秀賞作品をもとに設計しており、ユネスコ世界遺産に登録されたボローニャ市街の特徴である「ポルティコ(柱廊)」を表現しています。

赤ちゃんの駅
民間施設を含む187か所の施設を「赤ちゃんの駅」として指定(令和4(2022)年4月1日現在)。授乳やオムツ替えなどに利用でき、「赤ちゃんと一緒でも安心して外出できる」と好評を得ています。